

ていた。そんなときに、幸運が舞い込んできた。同級生の竹内君と、ひょっこり出会ったのだ。懐かしさでいろいろ今日までのことを話し合った。その彼の努力で、中学校教員に採用されることになった。月俸五百円、宿舍は中学校の物置を改造した。これで再び教員として職に就くことができた。

昭和二十五年には、妻の両親がいる広島の本郷小学校に転任したが、その後、家の事情で再び青森県内の学校に転任した。

教員職を定年退職して自由になった私の心の中に、わだかまっていたのは、「お前の青春は、何だったのか?」「満州国とは、どんな国だったのか?」「なぜ日本人、特に軍部は関東軍を増強して中国大陸まで侵略して、そこで何があったのか?」などの思いである。何とかして中国東北部に旅をして、戦争の遺跡をこの目でこの足で確かめたいと、十年ほど前から中国を一人で歩き続けてきた。中国の青少年と日本の青少年のために、その実態を語り残したい。私は年令に関係なく、生きているうちは、毎年必ずこの旅をすることに

している。

光陰赤土に流れて

岩手県 三田 照子

一 盧溝橋事件

昭和十二(一九三七)年、私が仙台市のミッションスクールの専門学校に在学していたとき、中国人の少女が音楽科に入学し、私が入っている寮の隣の部屋に住むことになった。彼女は中国語と英語しかできないから、すぐに打ち解けることはできなかったが、日本語が分かるにつれて意志疎通もスムーズになり、明るく愛くるしい性格の彼女は、寮仲間のアイドルになっていた。ところがその年の夏、彼女が突然姿を消した。寮の舎監の先生は、東北大学に在学中の兄が突然寮にきて「緊急事態が起こったので帰国することにになった」とだけ言って、彼女を連れて帰ったと話してくれた。私たちとしてはせつなく親しい仲になったの

に、一言の挨拶もなしに帰ってしまった彼女に、何か裏切られた思いがした。

ところがすぐ後で分かったが、緊急事態というのは七月七日、北京の南郊外で起こった盧溝橋事件のことであった。この事件をきっかけに、やがて全面的な日中戦争に発展してゆくのだが、兄妹にとっては日本でのんびり勉強を続けるような状況ではなかったであろう。これが私と中国人の人の最初の出会いで、四年後彼女の国、中国に渡ることになろうとは、そのころ夢にも思っていなかった。

二 旅立ち

当時、日本は世界恐慌のあおりを受けて経済危機に直面し、政治的には軍部が実権を握り、満蒙開発政策が強化された。国策として渡満を勧め、特に、土地を持たない二男、三男は夢を北満の開拓団にかけて大勢が渡って行った。満州に渡った若者の中には、現地の中国人を食い物にして金を儲けて帰って来る者もいたが、私は金儲けではなく日本と中国の友好のために生涯をささげる覚悟で、新天地満州に渡ろうと思ってい

た。母は私の考えを理解してくれて、できることなら同じ目標を持つ伴侶が居てくれたら安心だし、嬉しいと言ってくれた。そして出会ったのが、三田善右エ門であった。三田は満州建国の理念「五族協和」を掲げて作られた組織、協和会青少年課の責任者だったので、日本に帰ってくる余裕はなく、母が私を連れて満州に渡り吉林市で結婚式を挙げた。三田は五族協和の理念を信奉し、日中が心一つにして助け合い、真の王道楽土を作るために、献身的に毎日を過ごしていた。中国の青年たちとの交際を深め、夏には松花江シヤンカキョウでキャンプをして寝食を共にするなど、水を得た魚のように喜々として働いていた。

三 日本語無料塾

私には、渡満以来一つの願い事があった。日本語を学びたいと思いつながら、学校に行く学費と時間がなく困っている中国人青少年のために、自宅で無料の夜学塾を開くことであった。塾の名前は「聖焰塾」とつけ、主人も帰宅後手伝ってくれた。塾生は日を追って増え、皆若く情熱に燃えていた。打てば響くのであ

る。満州国を担う、この若い青年たちとのふれあいに、私たちは感動し、楽しく、ありがたく思った。中国の人と本当の友として生き、ここに骨を埋めようと思意したのである。

四 ソ連参戦

三田の妹恭子は、吉林から汽車で三時間ほどの蛟河^{ジャオヘ}の町で暮らしていた。夫を兵隊にとられ、娘二人と三人で暮らしていたが、八月末には三人目が生まれることになっていった。三田は大変だろうから、吉林で一緒に暮らそうと妹を呼びに出かけたのが、昭和二十年八月八日の朝早くであった。しかし義妹は、「私には一緒に蛟河で夫の帰りを待とうと約束した奥さんたちがいる、四歳の長女静子だけを頼む」というので、三田は静子だけを連れて夜七時ころ吉林に帰って来た。しかし、この時これが親子、兄妹の永遠の別れになろうとは誰も思わなかった。

三田が帰って来て五時間位たった夜中、爆発音とけたたましいサイレンの音が響き、夢が破られた。三田は米軍機の空襲かと思ひ、すぐに協和会に向かった。

攻撃してきたのは中立条約を結んでいたソ連と聞いて、驚くばかりであった。ソ連国境近くにあった日本農民の開拓団では、若い男子は皆兵隊にとられ、残っているのは老人と女子供だけである。逃げまどうばかりであった。ソ連軍の侵攻は予想以上に早く、うわさではすでに白城子まできているという。私どもが住んでいる吉林が戦場になるのは、もう時間の問題であった。それにしても、在満日本人が頼りにしていた関東軍はどこに行ってしまったのか。かつて軍が傲慢にし、威容を誇っていた関東軍なのに、司令部は空っぽだし、兵隊の姿も見えなかった。

十三日、市と警察と協和会の指導者たちが会談した結果、軍が頼りにならない以上、吉林を脱出して樺甸^{カッヂ}の山中で越冬するしかないことと決まった。女たちにとって樺甸とはどこか、山というが子供が歩いて行けるのか、食糧はどうするのか、防寒具もないのに零下三〇度以下にもなる山中で体がもつのか、など不安と疑問がいっぱいあった。とにかく今できることをしなければと思ひ、お隣の奥さんたちと食糧品の準備や、姪の

静子の冬着作り、それらを持ち運ぶため帯心でリュックサックを作ったりした。こんな苦勞をしても生きのびるのは難しいのではないか、女たちの心は暗く言葉もとぎれがちだった。三田は毎朝早く出かけては、夜遅く暗い顔をして帰って来た。思い詰めている顔だった。ラジオニュースが戦局を報じる中で、玉碎という悲しい言葉が聞かれるようになっていた。

五 敗戦

昭和二十年八月十五日昼、ラジオで天皇陛下が連合国に対して無条件降伏すると放送があった。外地にいるわれわれ日本人はどうなるのか、誰にも分からなかった。樺甸の山中で、極寒の冬を過ごす心配はなくなったが、その後日本人のたどった苦難の道は、想像を超えるものだった。まず、日本人を取り巻く中国人の態度が一変した。昨日まで笑顔で声をかけてきた人々が、今日は嘲笑しながら通り過ぎた。日本の国威を笠に着て、中国人に横暴な態度で接した人もいたのは確かなことだったから、今度はその報いを受けることになったのである。降伏から一週間目に、ソ連軍が

入城してきて、新聞の発行は禁止、ラジオも没収、金融機関はすべて接収されて、一銭の貯金も引き出せなくなった。ソ連兵の物盗りが始まったのは、ソ連軍入城後間もないころからであった。噂では、ソ連の第一線の兵隊は囚人部隊だという。通行人から時計、万年筆など日に付くものは何でも巻き上げてしまう。それだけではない。家にまで入り込んで、誰はばからず品物を持って行く。挙げ句の果てに、トラックを持ってきて品物を奪って行く。ついには物を盗るだけでは済まず、婦女暴行が日増しに多くなっていたのである。女たちは黒髪を切って坊主頭にし、顔に鍋墨を塗って男に化けて難を避けなければならなかった。

奥地の開拓団から、ソ連軍に追われて吉林市に入ってくる日本人難民が日を追って多くなった。彼らは逃げまどって山野を駆け、大河を渡るうちに、老人や幼児を死なせてしまい、途中で敗戦を知った人々である。三田は、それらの人たちが飢えと疲労で倒れて行くのを黙ってみていることはできず、それらの人の世話で、家に帰って来ない日が続いた。この様子を見

て、彼に協力する人が日を追って多くなるのは、有り難いことであった。吉林神社跡の広場に、日本人難民救済所の看板が立てられたのは、まもなくであった。難民はその後も増え続け、新しい救済所の建物を見つめるのが、ひと苦勞であった。救済所は日本人民会と名付けられ、略称は民会であった。治安が悪くなった吉林の日本人にとって、唯一の拠り所となった。日本人に対するいろいろな知らせは、民会から出されるようになった。

六 暴動

日本では想像もできないことだが、中国では政変の度に暴動が起き、富豪が一夜で貧乏人に、また反対のことも起こると聞く。九月に入ってから、地方の浮浪者が次第にその数を増して、群を作り不穏な動きをしているという話が伝わってきた。そして、間もなく吉林の日本人の住宅が次々に襲われるようになった。民会は警察庁や治安維持会に取り締まりを頼んだが、どちらも暴徒を抑えるだけの実力はなかった。暴徒に襲われた家は、ちょうどイナゴの大群に襲われて丸裸に

なった畑と一緒に、家財道具はもちろん、畳から窓枠まで何一つ残さず持って行かれてしまった。しまいに、何か金品が隠されているのではないかと庭を掘り起こし、壁までがす始末であった。しかし、私は近所の親切な中国婦人に助けられ、その人の助言で、玄関は板付けにして空き家を装い、出入りには裏口を使い、食糧や日用品の必要なものは、その婦人を買ってきてもらった。ときには、婦人の作った料理が届けられることもあった。

夜間塾に通って来ていた塾生も親切であった。毎日交代で誰かが顔を出して、何かと手伝ってくれた。ある日塾生が、「今日は朝から河南街道周辺に不穏な空気が流れているから気をつけるように」と伝えに来た。その日の正午過ぎ、百人を越す暴徒が、わずか数軒しかない私どもの隣組の家を襲った。塀を壊し窓ガラスを破り、獣のように殺気だった日つきで押し寄せてきた。住民はただ逃げ回るだけであった。

しばらくして、牧師は応召し、その子も学徒動員され夫人一人残っているキリスト教会に、教家族で住も

うという案が出され、私たちもお世話になることになった。身重の私と幼い姪と病身の妹は、とても歩いては行けないので、いやがる満人に相場の三倍のお金を渡して馬車に乗せてもらい、やっと教会にたどり着いた。ところがなんということか、ドアから追い出されてきたのは、今日から一緒に暮らすことになっていった牧師夫人と、数人の婦人たちであった。聞けば、突然現れたソ連将校に、「今日から将校宿舎にする。家具調度など一切残したまま、三十分以内に立ち退け」と命令されたという。今日から一緒に住む私どものために作った、お汁粉にも手を付けないまま出てきたこと。戦に負けた者たちに、言い返す言葉はなかった。やむを得ず、私どもは近くの小学校に避難することになった。小学校に着いてみると、教室はもちろん廊下まで避難民でいっぱいであった。遠くの開拓団を追い立てられた人や、病院から放り出された傷病兵、家を暴民にとられて行き場を失った人たちである。どうにか詰め合って廊下に入れてもらって一息ついたが、私たちは着替えどころか顔をふくタオルさえ持っ

ていなかった。食べるものも、牧師夫人がソ連兵の目をかすめて持ち出した、一握りの米だけである。それを薄いお粥にして、十人で食べて飢えをしのいだ。その晩は、廊下で折り重なるようにして寝たが、便所に行く人に踏まれたりして、まんじりともしなかった。

三日後、私は主人がいる難民救済所を尋ねた。ちょうど三百人ほどの難民が入ってきたところだった。長旅の疲労、怪我、病気のせいであろうが、救済所に着いてすぐ倒れる人が続出した。主人は、かいがいしく彼らの世話をしていた。私を見付けて、「苦勞をかけるね」とねぎらいながらも、「お前が今死ぬことはないだろう。この人たちは放っておいたら今夜にも死んでしまうんだよ。苦勞かけるけど僕に思う存分働かせてくれ」と言った。彼は、いま自分が何をすべきかということをよく知っていた。立派だと思いながら小学校に帰った。

七 義妹の死

日本人の暮らしは、日増しに苦しくなるばかりであった。十一月出産予定の私にとって、小学校の廊下

の生活は敵し過ぎた。九月を過ぎた満州の朝晩の冷えは、体にこたえてくる。暴動で、民会周辺と市営住宅の一部を残してほとんど壊されてしまった。私は、被害を受けずに残っている知人の家を転々と渡り歩き世話になった。知人とはいえ、他人の家に幼い四歳の姪と、病身の妹と、身重な私とがやっかいになることは、言葉で言い表せないほどつらかった。そんなとき、吉林から汽車で六時間ほどの舒蘭ソロンの町の人と一緒に、主人の弟の一家六人がたどり着いたのである。舒蘭の日本人家族に対して、中国人町長が特別の計らいで吉林行きの列車を出してくれたのである。当時弟は

兵隊にとられ嫁は生まれたばかりの乳児と二歳、四歳、六歳の子供四人をつれていた。それに四歳の子ははしかにかかって嫁一人で四人の子を連れて駅まで走ることは不可能であった。そこへ突然応召していた夫が帰って来た。彼ら一家はこうして列車に乗ることができた。弟一家は家族そろって吉林へ避難でき、私どもと一緒に暮らすことになったが、蛟河に住んでいた主人の妹は、なかなか現れなかった。三田も妹の身の

上を心配したが、一日に二百人三百人と流れてくる難民救済に忙殺され、ここから動くことは到底できなかった。

十一月に入ったある日、蛟河から三人の連絡員が救援を求めてやってきた。暴徒に何度となく襲われ、命からがらたどり着いたという。連絡員から聞いた蛟河の状況は悲惨なものであった。ソ連兵に即刻立ち退けと言われ、聞いたこともない遠い中国人の田舎へ向かって歩きはじめたが、弱い子供たちは途中全員が死に、大人は約半数しか生き残れなかった。三田は、その報告を聞いて啞然としていたが、一番気に掛かっていたことを三人の連絡員に聞いた。「農学校の矢野先生の家内、恭子は無事でしょうか」「では、あなたは三田さんですか」と確認されたあと聞かされたのは、次のようなことであった。

八月末、蛟河の治安は目立って悪くなった。日本人は、三カ所の収容所で集団生活を始めたが、一人畳一枚の割である。彼女は夜中に産気づいたが産婆はいないし、迎えに行こうにも、表には殺気だった暴徒が群

れている。とにかく周りにいた女性たちが手伝って来て、明け方女の子を産んだが、数日後高熱を出した。産褥熱であつた。しかも、ソ連兵は「蛟河の日本人は今日中に王家崗・青平村に行け」と命令した。

義妹はとうてい歩けないので、皆で荷馬車を雇って載せて行くことにした。義妹は手を合せて「兄のいる吉林へお願いします。途中死んでも本望です」と言ったが、それもかなわず、三日目王家崗に着いたとき、夫と兄の名を呼びながら息を引き取った。亡くなった義妹は、腕に二歳の恵子と、生まれたばかりの乳児を抱いたままだった。亡骸は、榆ユの木ノの根もとに埋めた。残された子供たちも次々に亡くなった。どうにもならなかった。義妹のことを思うとき、何十年かたった今でも、新しい悲しみと怒りの涙が吹き上げてくる。運命として片づけるには、あまりにも理不尽だと思つた。私が預かつた義妹の長女、静子は孤児になつてしまつたのである。

八 長男の誕生

丸裸で家を追い出され、あちこち知り合いの家に身

を寄せ、世話になる生活がすでに三カ月を越えていた。明日何ができるか分からない、不安な思いでいた家族に、十一月二十六日の明け方、一つの希望の光が与えられた。長男の誕生である。標準より小さいながらも、元気に産声を上げる我が子を抱きしめながら、私はうれしさで涙が止まらなかつた。ソ連兵や暴民にとつて、日本人の命など猫の子にも値しないほどの扱ひだつたから、一つ間違えば赤子の命など、ふつと消えてしまうようなはかないものであつたのに、この子は様々な苦難を乗り越えて、必死で生まれてきてくれたのだ。だが反面、世に生を受けずになつた子供や、母親たちのすすり泣く声が、長男の産声と一緒に聞こえるようで悲しかった。

避難民の救助に忙殺されていた主人が、この子に顔を合わせたのは生まれて三日目であつた。希望を与えてくれたこの子に、主人は「望のぞむ」と命名しながら、主人の目にも感動の涙が光っていた。

九 雑居生活

私どもは、運良く暴動に遭わなかった社宅を借りることができた。学校や収容所で不自由な生活をしている知人たちに声をかけ、四部屋に六家族の共同生活を始めたのである。舒蘭からきた、主人の弟一家も加わっていた。ここは三田の仕事先の民会にも近かったので、難民入所の通報があれば、夜半でも駆けつけることができて便利であった。ただ、物価はうなぎ上りに高騰してゆく。自分と子供たちの生命は自分で守らなければならぬ。皆何がしかの収入を得られる仕事を求めて必死だった。寿司を卸してもらって小売りをする人、お汁粉屋を始める人、納豆売りを始める人などいろいろだった。私も中国人からもやしを卸してもらい、一軒一軒回って売って歩いた。みな命がけで頑張ったが、利益は少なかった。私たちは、たばこ作りの仕事を始めた。たばこの葉を買ってきて、義弟が細かく刻み、香料を含ませる。それを紙で巻くのである。夜遅く帰宅する夫も手伝う。女たちは小箱を作り、たばこを十本ずつつめて、翌日人出が多い中国人

街へ売りに行くのである。

「煙草^{エンジェル}、煙草」。売り声を張り上げなければならぬのに、慣れない身にはか細い声しか出ない。私は、たばこの箱を抱えて時々売り声をかけながら、中国人街の市場へ急いだ。途中二階の窓から「要煙草^{エンジェル}」と呼んでいる声に気づいたのは、通り過ぎてからであった。声をかけてくれた人のところへ戻って、たばこを差し出した。呼び止めた人は、「ずいぶん急ぐ煙草売りだね」と笑っていた。私が売った最初の一箱である。市場に着いてみて驚いた。たくさん日本人がいて、皆たばこ売りである。私はすっかり自信をなくしてしまっただが、日がたつにつれて慣れてきた。ある日、かつて塾生であった馬さんが、たばこを売っている私を見つけ走り寄り、「先生、先生がたばこ売りを……」と私の姿を見て、ぼろぼろ涙を流した。彼は持っていた財布を差し出して、「少しですがどうぞ使ってください」と言った。私はびっくりして財布を馬さんに返し、「馬さん、あなたのその優しい気持ちだけ頂きます。これで生きて行く力がわいてきました。」

私たちがちよつとばかり苦勞するのは当たり前のことなの。頑張るからね」と言った。馬さんは、ぬれたほほをぬぐいもしないで、私の差し出した手を握って立ち去った。わずか五年間の彼らとのふれあいが、お互いの胸に生涯忘れられないものを残してくれた。馬さんが呼びかけてくれたのであろう、昔の塾生たちが入れ替わり立ち替わり寄っては、安否を確かめ合い、最後まで交わりを続けてくれた。

夫と義弟のたばこ巻きの仕事は、たいてい真夜中二時ころまで続いて、やつと床に就く。ある日床に就いたと思ったら、避難民が大勢入って来ましたという連絡があつて、すぐ收容所へ駆け出して行った。三田の救護活動は、妹の死後一層真剣なものになっていった。救いを求める人々の顔が、妹の顔に見えると言ひ、避難民を一人でも死なせてはならないと、ただの一日も仕事を休まず、彼は命がけで働いていた。このひたむきな気持ちが、疲れ切った体を支えたと言えるかもしれない。

二十一人もの雑居生活でいろいろなことを体験し

た。一つのフライパン、一つの大鍋が大家族を渡り歩く便利さを味わったのもその一つである。しかし、この狭い家で朝から晩まであけっぴろげの生活である。こんな中で、六世帯もの大人数が最後まで仲良く過ごせたのは、大黒柱の男たちが命をかけて生きぬこうと頑張っているのが、女子供たちにも分かったからだと思う。

十 耐え難きを耐え

塾生の一人がきて、「蔣介石總統が、日本人にひどい仕打ちを絶対にしてはいけないと繰り返し放送していたから、中国人の態度も良くなるでしょう」と喜んでくれた。しかし、若者のいたずらはやまず、か弱い女たちがどれほど泣かされたことか。お菓子の箱を抱えて売り歩いている奥さんや、バケツに豆腐を入れて売って歩いていた女性に、急に足を出して転ばせ、散乱したお菓子やバケツの水で泥まみれになった女性を見て、はやし立てたりした。日本の男たちも見えてぬふり、負けた国の方には勝ち目はない。しかしこれらはまだ牛やさしいことであつた。ソ連兵が日本人捕

虜逃亡者の穴埋めに、街で誰彼なく日本人男性狩りを行つたのである。捕まつた男は、皆貨車でシベリアに送られた。

こんな状況の中で、栄養失調の日本人を襲つたのは、さまざまな伝染病であつた。子供は、はしか、百日せき、肺炎でほとんど死んでしまい、大人たちも、発疹チフス、コレラ、結核にかかつて何百人と死んでいった。敗戦前に夫を亡くした私の妹は、春を迎えるまでに、姑をはじめ一家九人を失つてしまつた。全員が結核であつた。親しくしていた平松家では、十年ぶりに子供を授かつて喜んでいたので、それもつかの間、結核と発疹チフスで一家は春を待たずに亡くなつてしまつた。毎日日本人の遺体を載せたリヤカーが、凍り付く砲台山の死体置き場へと運ばれて行く。平松一家の人たちも、その遺体の山に積み重ねられるのである。皆、母国の土を踏むまではと堪え忍んでいたのに、果たせずに亡くなつた人が多く悲しかった。

十一 市街戦

厳しく苦しい冬の寒さに耐え、ようやく柳の芽が吹

くころ、ソ連兵の帰国が始まつた。日本人男子は使役として集められ、彼らが日本人から奪つた衣類、家具、ラジオ、会社の事務器具などを貨車に積み込む作業が、何日も続いた。奪われた人たちが、奪つた人のために無償の作業をさせられる、哀れな話である。

ソ連兵に代わつて、中国軍が入つてきた。ようやく落ち着いたと思つたころ、また不穏な空気が漂い始めた。蒋介石軍が攻撃してきたのである。銃声が昼夜を分かつた響いていたが、夕方、吉林大橋が大音響をあげて爆破された。工事が完成し、祝賀式を終えたばかりの橋である。中共軍が退却するとき、最後の一人が渡り終えると同時に爆破したという。その振動はすぐく、鼓膜が破れたかと思うほどだった。しかし、われわれが一番苦しかったのは、軍の交代とともに通貨が変わることであつた。ソ連軍票、八路軍票、今度は国民党軍票である。その都度、手元にある軍票は紙屑になつてしまふのである。

蒋介石軍は国民党とも中央軍ともいうが、入城して間もないある日、兵隊が顔を出して、二部屋を提供す

るようにと言った。今は二十五人にふくれあがったわれわれが、残った八畳と六畳の二部屋に押し込まれることになるが、断ることなどできなかった。こうして、翌日から中央軍の兵士と一緒に生活が始まったが、彼らの生活ぶりが日本兵とあまりに違うのに驚いた。髪はポマードで固められ、国防色のワイシャツにネクタイを締めて外出する。途中上官に会っても、笑顔でちょっと会釈する程度である。部屋からは絶えず笑い声が聞こえ、兵隊生活を楽しんでるように見えた。班長は無口な人であったが、誰でも気軽に話しかけたくなるような温かい人柄で、兵隊たちの信望を一身に集めていた。同居は二カ月に及んだが、一軒家が空いたと言つて移ることになった。別れの前夜、手料理を持ち寄つて和やかな夕食会が開かれた。敵味方などという感情は全くない、和やかな会合であった。

十二 帰国準備

七月に入つてから、帰国の朗報が入つてきた。いままですいぶん誤報があつて失望させられていたが今度は間違いがないらしい。奉天（瀋陽）などはすでに引

揚げを始めているので、吉林も準備を始めるようにとのことであつた。やつと、懐かしい肉親や友人のいる故国に生きて帰れるのだ。敗戦後たつた一年とはいへ、厳しい苦難を乗り越えての一年は、十年にも二十年にも思われるほど永かつた。国に帰りたい、その思いだけでも希望がわき、生きる力にもなつた。人々の顔に、忘れていた笑顔が戻つた。やがて、帰国のおしりが配られ、時計、宝石、薬、医療器具など一切持ち出し禁止で、持つて帰れるのは毛布一枚、衣服は冬物一着、夏物二着、写真は風景の入れないもの十枚まで、お金は一人千円だけであつた。違反者は厳罰と書いてあつた。

帰国のための輸送は地域ごとに行われ、一組の人数は二十人ほどで、十二班に分けられていた。われわれ第六班であつたが、民会の仕事に携わっているものは他の班を送り出してから最後にと、第十二班に繰り入れられた。七月十三日午前十時突然帰国指令がきた。駅に午後三時まで集合というのである。いままですやっていた商売の整理や、帰途の食糧の準備などをし

て待機していたが、その後はなしのつづで。八月半ばになっても、やつと半分ぐらいしか出発していない。九月になってようやくめどが付いて一安心と思つていたある日のこと、今度は主人が「俺は残ろうと思う」と言いだったので驚いた。「残るといつてもこれが最後の列車でしょう、この後はないのよ」「しかし、難民はまだ一日百人、二百人と入ってきている。八百人もの伝染病患者は、隔離されたまま身動きもできずに閉じこめられたままだ。この人たちのため、病人列車を出してもらい、日本に送り届ける仕事は僕にしかできないと思う。早く帰国したいのは皆同じだから」と言う。弟の逸平が「兄さんがそこまでしなければならなかなあ。いままでに、充分人のために尽くしたじゃないか」と言ったが、主人の決意は固かった。主人を残して行くことになった。

九月十三日、旅立ちの日がきた。嵐であった。私は防空服を着て、食糧や身の回りのものを入れたリュックサックを背負い、十カ月になった望を抱き、五歳になった義妹夫婦の忘れ形見の静子の手を引いて、大雨

のなか駅に向かった。列車は無蓋車だから、毛布も持たない私にとつて、ねんねこ一枚だけが雨よけであった。これから先の長い旅が思いやられた。夫や、何人かの仲間が雨に濡れながら見送ってくれた。「望と静子を頼んだぞ」と私の目を食い入るように見つめながら言う夫の言葉に、私はうなずくだけであった。これが永遠の別れになるかもしれない。体に気を付けて下さい、と言うのが精いっぱいであった。発車のベルが鳴って、列車は動き出した。「三田さん、後を頼みます」「ご苦勞様です」どの貨車からも、残る三田とその仲間に向かって声がかげられた。一度は骨をうずめる覚悟であった吉林が、雨の中に遠ざかっていった。

日中の掛橋たらんと夢はせて

血をたぎらせし我が若き日よ

もしまた吉林に来る日があつたなら、人間として飾りのない付き合いをしたい。「再見」私は心の中で何度也叫んだ。

十三 葫蘆島へ

無蓋車の旅は、難行苦行の連続であった。車一台に

二百人も詰め込まれ、身動きもままならなかった。貨

車から降ろされて、何キロメートルか歩かされ、到着した収容所は戦争の傷跡が生々しく残っている廃屋だった。屋根も壊れ床もない土間に、おしめを敷いて眠るのである。雨の日は、ずぶぬれになってがたがた震えるばかりだった。弟の子ども高熱を出してなかなか下がらなかった。

足止めで滞在が長引くにつれて、最も困るのは食糧である。リュックサックに入れて持ってきた食糧も、底をついてきた。収容所の周りでは、日本人を自当てるに食糧品を並べて売っているのに、余裕のある人はそれを買ってしのいだがお金のない人は収容所の不要品交換所で、着ている上着を売ったりして食料品を手に入れた。食べ物他に、どうしても必要なのは水であった。飲み水もそうだが、私はおしめも洗わなければならなかった。こんな生活を続けながら、順番を待っていた私どもが、船に乗れて葫蘆島の岸を離れたのは、吉林を出発してからひと月ほど経ったころだった。

十四 故郷へ

昭和十六年、希望にあふれ渡満したあの日から五年間で、私たちの夢は終わった。喜びや苦しや悲しみなど、数多くのことを思い浮かべながら満州が遠ざかって行く。故国へ故国へと、私たちを乗せ雲仙丸は進んでいた。乗船して初めて給食の高梁飯が配られた。敗戦以来満足に食べていなかった我々は、山盛りの高梁飯に歓声を上げた。しかし日三度、来る日も来る日も高梁飯と、ひじきが三本入った塩汁だけという食事に、皆だんだんと手を付けなくなっていく。そして、衰弱しきった人は、上陸を目前に眠るように死んでいった。私も栄養がとれず、母乳が全く出なくなつたうえ、用意したミルクも知らないうちに盗まれ、望はだんだん泣く声さえ弱ってきた。医者も医療器具、薬も取り上げられ、手の施しようがなかった。弟は虎の子にしていたたばこ十個を船員に渡し、子供の栄養になるものをと頼んだが、持って来てくれたのは、ホウレン草のおつゆと焼きリンゴ一個であった。船には野菜、魚、肉など積み込まれたのは知っていたが、引

揚者には出されず、特別な人たちだけが招待されて、

昨日はステーキ、今日は天ぶらだったなどと、得意げに話していた。人間は、困難な状況に陥ったときには、弱いものに気を配ることができないものだと思つた。乗船して十日目、ようやく博多港に上陸した。援護局の人たちが、「ご苦労様でした」と出迎えてくれたこの一言を聞いて、いままでの苦労が泡のように消え、皆涙を流して喜んだ。満州では見られなかった松の緑も、ずさんでいた私たちの心を癒してくれた。

弟は岩手花巻行き、私は山形行きの列車に乗り、いままで一緒に来た人々と別れることになった。汽車に乗った静子が、「内地の汽車には屋根があるのね、すてきだね」と言ったので、乗客が一斉に笑ったが、みんなほっとしていた。長い時間かかって、やっと郷里の三瀬駅に着いた。駅には母と妹が出迎えてくれた。母は、よく生きて帰ってくれたと望を抱きながら涙にくれ、静子にはもう大丈夫だよ、私が静ちゃんのおばあちゃんだよ、と言いながらまた泣いていた。

十五 三田の帰国

夫三田善右エ門が帰国したのは、その年の最後の帰還船だった。三田は、吉林の収容所の世話をしていたときに亡くなった、千人に近い人の名簿と名前が書かれた遺品の眼鏡、万年筆などを、丁寧を持って帰った。

落ち着く間もなく、名簿の家族探しが始まった。三田は名簿の住所宛に家族へ手紙を出し、手紙が届いた遺族からは、悲嘆にくれた返事が届いた。彼はその遺族を慰めるために家を訪問して、預かった遺品を届け、丁寧に供養した。また、中国ヤソ連から引揚船が舞鶴に着くたびに迎えに行き、なにかと世話をした。それは、三田にとって中国でし足りなかった、同胞救助の続きだったのであろう。

三田はまた、戦争中日本軍に徴用されたまま非業の最期を遂げ、山野に眠ったままになっている中国人の遺骨を探し出し、中国へ送り届ける仕事に加わった。これは、中国へのお詫びの気持ちがあったのである。中国からは、李徳全女史が来日され感謝の意を伝

えられた。三田は自分が関わった一人一人の幸せのために、苦勞をいとわず働き続け、昭和三十六年病に倒れ、四十九歳で逝った。

終戦から、もう半世紀以上が経とうとしている。戦争を知らない人々が、七〇%を超したと言われている。だからこそ、戦争の実体がどういふものであるかということを知らない若者たちに伝えるのは、身をもって体験した私どもの使命だと考えて、筆を執った。

はるかなる承徳

福島県 藤原 礼壽

一 承徳での出来事

「だれかっ！」突然に、鋭く短い声はまだ明け切らぬ朝もやの中から響いてきて、銃を構えた兵士が追ってきた。銃口には着剣をしているのでびっくりしたが、すかさず「日本人だっ！」と、大声でどなった。

当時、旧制中学の学科に軍事教練があったので、多少このような事態での対応についての知識は持っていたため、それが歩哨であることと、ぼやぼやしていたら危ないということを、とっさに判断したからだった。

この道は、街の中心街を走る南營子大街ナンエイシノオウガイから忠靈塔へ通ずる割合に広い道で、その日も忠靈塔へ参拝するために、早起きをして一人で出掛けてきたところだった。しかし、いまだかつてこの道でこんな目に遭ったことは、一度もなかった。そこから右手に、しばらくは陸軍の将校用の官舎が続いている。「訓練なのか？ 人騒がせなことをするものだ！」と、ちょっと腹を立てたが、そのときにはそれ以上はあまり深く考えなかった。そして忠靈塔から帰りの道には、もうどこにも歩哨の姿は見えなかった。しかし、それから十日後には、ソ連軍が満州に突然侵攻してきたのである。「あの時、すでに陸軍官舎はもぬけの殻だったのでなかったか？」と、今でも思っている。関東軍の西南部防衛司令部があった満州国熱河省の省都、承徳という街での終戦直前の出来事であった。